

かずさの博物誌

アマサギ ～全世界に分布を拡大～

文・写真／成田篤彦

きて上総で繁殖し、秋になると南に帰る夏鳥である。

約40年前の夏、水田地帯の鳥を調べていた頃、農家の方から「最近、シラサギは黄色になったね。どうしたのかね」と尋ねられたことがある。

「あれは今までいたサギとは別な種類で、アマサギです。シラサギという種名はなく、コサギ、チュウサギ、ダイサギ、アマサギを含めて白いサギをシラサギと言っています。」と答えたことを思い出す。ちょうどその頃、農薬の空中散布が問題になっていたので、尋ねた方は「シラサギに農薬の影響が出たのか？」と心配したのかもしれない。

今でもアマサギは上総で毎年見られるが、それほど多くない。谷津田や海岸ではほとんど見られず、広い水田地帯にいる。先月も稲がすくすくと育っている中にたまたむ2羽のアマサギを見た。広々とした青田で見る彼らの姿は初夏の清々しさを強く感じさせる。彼らは南国から渡って

鷺山に止まるアマサギ

アマサギのつがいは巢作りから抱卵、ヒナへの給餌(きゅうじ)まで、協力して行う
=2008年6月7日袖ヶ浦市 成田篤彦撮影



©成田篤彦

飛ぶアマサギ

数羽の編隊を組んで飛ぶ
=2008年6月7日袖ヶ浦市 成田篤彦撮影



©成田篤彦

さて、一昨年6月、袖ヶ浦市にある鷺山(さぎやま)サギ類の繁殖場所)を見に行った。遠くから見るとアオサギ、ダイサギ、コサギ、チュウサギ、アマサギが林の中にポツポツと見える。鷺山に近づいて、見上げてみるとアオサギやダイサギ、チュウサギ、コサギの4種が次から次へと降りてきては、鷺山から飛び立っていく。彼らの飛んでいる姿を撮ろうとするが、速くて焦点が合わない。そして、午後4時頃にはこの4種のサギは飛ばなくなった。ところが、その頃からアマサギが数羽の編隊をなして、次から次へと鷺山に戻ってきた。つばさを左右に傾けながら、脚を広げて、ゆったりと鷺山の林の中に降りていく。そのため、素人の私にも飛行中にシャッターを切らせてくれた。おかげで充分に撮影を楽しんだ。また、「おっとりしているサギだ」と思った。だが、今月初旬に広い水田地帯で撮影しようと思つくとすぐに飛び立った。思ったよりもずっと用心深い。

ある。これは牛が歩くときに飛び出す昆虫類を捕るためである。日本でも初秋の高原の放牧地では幼鳥も一緒になって牛の周りから飛び出すバツタ類を捕えるのが見られるそう。農耕地ではトラクターなどにもついて歩くそう。主な餌は昆虫、とくにバツタ類とカエル、トカゲなどである。上総ではチュウサギやダイサギが秋にトラクターの後を追って飛び出す虫を捕らえているのを観察したことがあるが、アマサギはまだ見たことがない。ちなみに、英名をCattle Egret、学名(世界共通の種名・ラテン語)はBubulcus ibisというが、Bubulcusは牛で耕す人、Ibisはトキの意味。また、アマサギは本来南方系の鳥で台湾以南に多かつたのがしだいに北上を続け、関東地方にごく普通に飛来するようになった。そして、とうとう北海道南部にも姿を現したという。日本だけでなく外国でも旧大陸(アジア・アフリカ・ヨーロッパ大陸)から新大陸の南米へ移ったアマサギが北米に分布するようになったという。彼らが全大陸へ分布を広げたのは人為的に持ち込まれたのではなく、鳥伝いに海をこえていったと考えられている。



©成田篤彦

▲アマサギ サギ科

体長50~60cm。コサギより小。夏鳥(4月~10月に見られる)。

全大陸の熱帯から温帯に分布=2008年6月7日袖ヶ浦市 成田篤彦撮影

とところで、以前、テレビの放映で東南アジアやアフリカの牛の背に止まっているアマサギの姿を見たこと

普段、上総で何気なく見ているが、アマサギが人々の開発行為が原因で世界中に分布が広がったとは思ってもよらなかった。



©成田篤彦

▲水田で餌を捕るアマサギ

昆虫やカエルなどを捕る。他のサギよりも乾いた場所を好む
=2006年6月5日木更津市椿 成田篤彦撮影

参考文献
高野伸二「1967」『原色・自然の手帖野鳥』講談社、小林桂助著「1967」『標準原色図鑑全集5鳥』保育社、日高敏隆監修「1996」『日本動物大百科3鳥類I』平凡社